

平成 28 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告

アセスメントツール開発

I. 事業要旨

本事業では、市内のどの支援機関においても、同じアセスメントツールを活用できるよう展開することで、支援者が、個々人の状態やニーズを明確にしたり、共有しやすくなること、また、支援者や所属機関が変わっても、情報が引き継ぎやすくなることで、本人や家族の負担を軽減することを目的とする。

本年度は、実態把握のため、市内の支援機関を対象にアンケート調査と、独自にツール開発を行っている機関の視察を実施した。

アンケートは、市の、発達障害者の支援機関（市内のすべての相談機関と、福祉サービス事業所）を対象とした実態調査の中で行い、アセスメントツールやアセスメントのためのチェックリストの使用状況や、アセスメントを行う際に困難と感じていることの調査を行った。対象の 1171 か所（相談機関 21 か所、福祉サービス事業所 1150 か所）のうち、814 か所の機関から回答があり、現在、分析のためのクロス集計作業を行っているところである。単純集計の結果より、市内の支援機関においては、アセスメントツールを使用している機関は 12.7%、チェックリストを使用している機関は 32.4%のみであった。アセスメントを行う際に困っていることとして、「よいものがあれば使用したいが、何を使用すればよいかわからない」と答えた機関が、全体の 40.5%もあり、「実施できる職員がいない」と答えた機関も 28.6%あった。自由記述欄には、アセスメントのための時間や人員の不足、研修会がないために実施ができない状況なども挙がっており、アセスメント実施における課題が見えてきた。今年度、事業所へのインタビューは実施できなかったが、今後は、アンケートの結果より、機関種ごとの違いがあるか等を整理するとともに、独自にアセスメントツールを作成している機関や、アセスメントツールやチェックリスト等を使用していない機関等の中から、複数の機関を抽出し、インタビューを実施していく。インタビューの中から、現場の課題やニーズを明らかにするとともに、今後のアセスメントツール開発の対象や内容を具体化していきたい。

今年度は、大阪市の特設非営利活動法人「自閉症 e サービス」で視察を行い、独自に開発した「評価キット」とその使用のための研修会を見学したが、キットの内容や、開発の目的、普及のための研修会の実施方法などが大変参考になった。先進地の取り組みや、先行研究等を参考に、市の実態に応じたアセスメントツールを検討していく必要がある。既存のアセスメントツールを組み合わせることや、職員のアセスメント技術向上のための研修会等の実施についても視野に入れながら、市内共通のアセスメントツールについて検討していきたい。

II. 事業目的

発達障害児者の状態や支援ニーズを明らかにし、個々の能力や特性に応じた支援を行っ

ていくためには、アセスメントが不可欠である。しかし、それぞれの機関の機能やアセスメントを行う支援者の立場、スキル等により、アセスメントの内容や使用するアセスメントツールが違うため、その結果を、関わっている機関間で共有したり、ライフステージを通じて情報をつなぎ、支援計画に反映させていくこと等が、有効に行われ難い状況がある。本人や家族の負担を軽減し、適切な支援を提供するためにも、市内のどの支援機関においても実施できるアセスメントツールの開発が望まれる。

Ⅲ. 事業の実施内容

1. アンケート調査の実施

北九州市が実施した、発達障害児者の支援の実態調査（郵送アンケート）の中で、アセスメントツール使用等における実態把握を行った。対象は、市内の発達障害児者を対象とした相談機関、及び障害福祉サービス事業所の計 1171 か所（資料 1-2）である。

アンケートでは、発達障害児者の支援を行う際に、状態を把握したり個別支援計画作成のために、アセスメントツールやチェックリストの使用の有無や、どのようなツールを使用しているか、また、アセスメントの際に困っていることについての調査を行った。アンケート項目は、「発達障害児者支援とアセスメントに関するガイドライン」（辻井、2014）を参考とし作成した。（資料 1-3）

2. 先進地視察

独自に「評価キット」を作成し、普及のための研修会等を実施している、「自閉症 e サービス」（大阪市）での視察を、平成 29 年 2 月 18 日に行った。

「自閉症 e サービス」は、支援者への人材育成・コンサルテーション、余暇支援等を行っている特定非営利活動法人で、視察の際は、「評価キット」活用のためのセミナーの一つである「高機能自閉症ワーク」を見学した。「評価キット」は、青年・成人期版と幼児・学齢期版があり、それぞれ発達に応じて各 3 種類ある。詳細な実施マニュアルがあるため、現場で実際に支援を行っている職員が、比較的短い時間（1～1.5 時間）で実施することができ、対象者の特性や作業面での強み、学習スタイルなどを評価することができるようになっていた。「評価キット」は、標準化された心理検査ではなく、その情報を個別支援計画に反映させることを意識して作成されたものであるということであった。

3. 先行研究の調査

(1) 「医療・福祉機関におけるアセスメントツールの効果的使用とその研修について」（「特定非営利活動法人アスペ・エルデの会」辻井正次, 2012）

・「アセスメントツール利用実態に関する調査」では、全国 2790 の医療機関・福祉機関を対象に調査を実施し、「特に障害児者福祉施設・事業所において、有効なアセスメントの実施ができていない現状が明らかになった。理由としては、「人員不足」を挙げた回答が最も多かった。」ということである。

・発達障害児者のアセスメントステップは、①障害の診断と障害特性把握、②障害程度の把握と支援ニーズ（生活状況・適応状況）の把握、③発達状況・能力把握、④環境アセスメントで、特に①、②においては、標準化された、一定の客観的なツール

を用いて、すべての支援者が実施できるようにする必要がある。

(2) 知的障害者、発達障害者の支援における多分野共通のアセスメントと情報共有手段の開発に関する研究」(安達潤,2016)

・他分野共通の「評価パッケージ」等の研究開発において、発達障害者支援センターを対象とした情報共有に関する実態調査では、『共有情報内容』は共有情報の種類と分布が支援分野間で異なっており、多様な支援ケースに対応しつつ情報共有を実現するには、項目を絞り込んだ『評価パッケージ』は妥当ではないと判断された。」

IV. 分析と考察

1. アンケート調査結果

回答があった機関は 1,171 か所中、814 か所であった。外部委託によるクロス集計が未だ終了していないため、単純集計の結果を以下に示す。

アセスメントツール使用の有無は、表 1 の通りである。

表 1. アセスメントツール使用の有無

	使用している	使用していない	無回答	合計
回答数 (%)	103 (12.7%)	697 (85.6%)	14 (1.7%)	814 (100%)

アセスメントツールを「使用している」と答えた 103 か所の機関の、ツールの領域ごとの使用状況は、表 2～表 6 の通りである。

表 2. 知能検査・発達検査の使用

	よく使用している	時々使用している	合計
WISC	7	20	27
WAIS	1	13	14
ビネー検査	10	9	19
K式発達検査	2	7	9
K-ABC	0	9	9
DN-CAS	0	6	6
遠城寺式乳幼児発達検査	16	13	29
ポータープログラム	6	6	12
無回答	—	—	48
合計			173

※ 上記以外に使用しているツール
グッドイナフ人物画知能検査 (3)、保育パワーアップ研究会作成一般発達検査表 (2)、小児発達チェック (5)、子どもの支援度アセスメント (田研版) (1)、津守式・稲毛式乳幼児精神発達質問紙 (2)

表 3. 適応行動（生活能力）のアセスメントの使用

	よく使用している	時々使用している	合計
Vineland 適応行動尺度	1	8	9
S-M 社会生活能力検査	7	9	16
ASA 旭出式社会適応スキル検査	0	1	1
無回答	—	—	83
合計			109

表 4. 情緒と行動のアセスメントの使用

	よく使用している	時々使用している	合計
異常行動チェックリスト 日本語版 ABC-J	0	1	1
日本語版感覚プロフィール	0	1	1
無回答	—	—	101
合計			103

表 5. 自閉症スペクトラムのアセスメント

	よく使用している	時々使用している	合計
M-CHAT	0	1	1
PARS	1	5	6
CARS	0	11	11
ADOS	0	0	0
AQ テスト	0	4	4
PEP-3	0	8	8
TTAP	0	6	6
ADI-R	0	0	0
無回答	—	—	83
合計			119
※ 上記以外に使用しているツール AAPEP (4)、PEP-R (1)			

表 6. その他のアセスメント

	よく使用している	時々使用している	合計
ADHD-RS	0	1	1
CAARS	0	0	0
LDI-R	1	2	3
全国標準学力検査 CRT	0	2	2
音読検査	1	1	2
言語学習能力検査 ITPA	0	5	5
PVT-R 絵画語彙検査	5	4	9

ミラー幼児発達スクリーニング検査 JMAP	0	0	0
日本語版感覚統合検査 JPAN	3	0	3
無回答	—	—	92
合計			117

※ 上記以外に使用しているツール
言語発達診断検査 (1)、LC-スケール (3)、J.COSS 日本語理解テスト、教研式読書力判断テスト (1)、標準抽象語理解力テスト (1)、LCSA 学齢版言語・コミュニケーション発達スケール (1)、質問 - 応答関係検査 (1)、森田愛媛式読み書き検査 (1)、CARD 読み書き検査 (1) WAVES ビジョンアセスメント (2)、フロスティック (2)、RCPM レーヴン色彩マトリックス検査 (1)、視覚・運動統合発達検査 (1)、バウムテスト (1)、描画テスト (1)、YG 性格検査、SCT 精研式文章完成法テスト (1)
就労支援のための職業能力アセスメント (1)、ストレス・疲労アセスメントシート (2)、職業適性検査 GATB (2)、VPI 職業興味検査 (1)、
生活支援アセスメントシート (6)、法務省式各種アセスメントツール (1)、
認知神経リハビリテーションで用いられる評価プロトコル (2)、水野敦之氏のワークシート (1)、
URAWSS ディスレクシア検査 (1) 自作のアセスメントツール (8)、

スキルや能力の把握のためのチェックシート使用の有無を、表 7 に示す。

表 7. スキルや能力の把握のためのチェックリスト使用の有無

	使用している	使用していない	無回答	合計
回答数 (%)	264 (32.4%)	455 (55.9%)	95 (11.7%)	814 (100%)

チェックリストを「使用している」と答えた 264 か所のうち、使用しているチェックリストが、法人や機関が独自に作成したものか、他機関が作成したものかの内訳を、表 8 に示す。両方を併用している機関が 14 か所あった。

表 8. スキルや能力の把握のためのチェックリストの作成元

	独自に作成	他機関が作成	無回答	合計
回答数 (%)	212 (80.3%)	60 (22.7%)	6 (2.3%)	278 (105.3%)

独自に作成したものを使用している場合の、作成者や引用元について、表 9 に示す。

表 9. 法人や機関で独自に作成したものを使用している場合の、作成者や引用元

- ・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「就労支援のための訓練チェックシート」(3)
- ・困り感チェック表 (障害者職業センター) (2)
- ・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「就労移行支援のためのチェックリスト」
- ・精神障害者のための職業チェックリスト ・LCO チェックリスト
- ・チェックリストではなく、個人のスキルや能力を把握するための法人独自のフレームを使用している。その作成については、TEACCH プログラムを基本としながら、「フレームワークを活用した自閉症支援、著者：水野敦之氏、発行：エンパワメント研究所」を参考にしている。(3)

アセスメントを行う際に困っていることについて、表 10 に示す。

表 10. アセスメントを行う際に困っていること

	実施できる 職員がいない	何を使用すれば よいかわからない	その他	無回答	合計
回答数 (%)	233 (28.6%)	330 (40.5%)	38 (4.7%)	296 (36.4%)	814 (100%)
(自由記述)					
<ul style="list-style-type: none"> ・ アセスメントのための時間確保が難しい (3) ・ Vineland-II の研修が必要と考えているものの、研修会が市内 (県内) で行われていない。(2) 					

その他、自由記述欄に記載されていた回答を、表 11 に示す。

表 11. 自由記述

<ul style="list-style-type: none"> ・ 客観的評価は重要だが主観的評価も同じくらい重要な価値を持っている ・ 事業所、家庭、関係機関 (学校、病院、職業センター等) がアセスメントを共有することがなかなかできない (2) ・ 障害福祉サービス提供事業所は療育機関として診断するわけではないため、高額なフォーマルアセスメントツールは必要ない。ただし、適切で質の高いサービス提供を目指していく上で、本人のスキルや能力を把握する必要があるため、計画的なアセスメント場面の設定が必要である。また、その結果を共用し、対応の統一を図っていく上で「シート」等の資料作成は必要であるものの、現場においては、資料作成よりも情報更新していくことや、支援・援助場面に活用していくことの方が重要であるとする。(2) ・ 保護者への結果開示と説明については、近年、結果の開示を要求する声もでてきており、慎重に対応している。 ・ 検査者との関係性、環境などによりシートの結果は大きく左右されることも充分配慮すべきだと思う。 ・ 実施できる職員が限られている。
--

2. 考察

アンケートの結果、回答があった 814 か所の機関のうち、アセスメントツールを使用している機関は、12.7%と非常に少ない数であることが分かった。使用しているツールの領域別の結果は、知能検査・発達検査が最も多く、その他の領域は大きな差はなかった。回答した機関には、公的な相談機関や、療育機関も含まれているため、遠城寺式乳幼児発達検査 (29 か所)、WISC (27 か所)、ビネー検査 (19 か所)、WAIS (14 か所) を実施している機関が多かったが、その他、S-M 社会生活能力検査 (16 か所) やポーターページプログラム (12 か所)、CARS (11 か所) が 10 か所以上の機関で用いられていることが分かった。遠城寺式乳幼児発達検査や、S-M 社会生活能力検査、ポーターページプログラムなどは、長く使用されてきたアセスメントツールであるが、専

門的な研修を受けなくても、マニュアル等を参考にすれば実施できることや、専用の検査道具が必要ないことが、現場の保育士や施設職員が使用しやすい理由ではないかと想像される。また、アンケートに記載したアセスメントツール以外のものを使用している機関も多く、各機関が、それぞれの対象者や機関の役割に応じたアセスメントツールを、選んで使用していることが分かった。“自作のツールを作成している”と回答した機関も8か所あった。

スキルや能力把握のためのチェックリストは、32.4%の機関が使用しており、アセスメントツールよりも多く使用されていることが分かった。そのうち、80.3%が、機関や法人等で独自に作成したものを使用していることがわかった。アセスメントツールやチェックリストを、独自に作成している機関については、その具体的な内容について、いくつかの機関を抽出し、情報収集を行う必要がある。

「アセスメントを行う際に、困っていること」については、40.5%が、「よいもの（アセスメント）があれば実施したいが、何を使用すればよいかわからない」と答えており、どのようなアセスメントツールの種類や内容があるか、情報を知らない機関が多いことが分かった。また、使用したいが、「実施できる職員がいない」と答えた機関は、28.6%であった。自由記述欄には、「アセスメントのための時間確保が難しい」や、「実施できる職員が限られている」、「Vineland-IIの研修会が必要と考えているものの、研修会が市内（県内）で行われていない」などの意見もあり、使用していない機関は、アセスメントツール使用のための知識や実施スキル、人員、時間の確保に課題を感じていることがわかった。今後、アンケート結果により、機関種や対象者のライフステージにより、回答にどのような差があるか等を精査し、課題をさらに明確にする必要がある。

発達障害児者支援において、各機関間で情報共有するためには、共通したアセスメントツールが望まれるが、どのような情報が必要かは、安達氏の先行研究にもあるように、支援分野間で違っている。アンケートの中でも、様々なアセスメントツールが使用されていることが分かり、同じアセスメントツールを、すべての機関で、同様に使用することは、現実的ではないかもしれない。また、辻井氏は、PARS等に代表されるような障害特性把握と、Vineland-II等に代表されるような障害程度と支援ニーズの把握は、すべての支援者が実施できるようにする必要があると述べている。既存のアセスメントツールを組み合わせることや、職員のアセスメント技術向上のための研修会等の実施についても、視野に入れる必要があると考える。

視察を行った、「自閉症eサービス」の評価キットは、インフォーマルなアセスメントツールであるが、具体的な支援の参考にするための、発達状況や能力を評価することができ、障害福祉サービス事業所等の職員が、現場で無理なく少しずつ行えるという点で、有効で使用しやすいアセスメントツールであると感じた。使用のための研修会を定期的に行っている点など、参考となる点が複数あった。

今後は、アンケート結果の精査を行うとともに、結果を参考に、市内の事業所にインタビューを行うことで、市内の発達障害児者のアセスメントの実態と課題を明確にしていきたい。先進地の情報や先行研究を参考にしながら、重点的に取り組む支援機関の分野を検討し、アセスメントツールの内容を具体化していきたいと考える。

平成 28 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

I. 事業要旨

このプログラムの目的は、市内の福祉サービス事業所や教育関係者等が、講義や事例検討を通して行動障害のある発達障害者への支援方法を学び、現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することである。

一昨年度及び昨年度は、市内の事業所や特別支援学校の実践報告及びパネルディスカッションを行った。事後アンケート調査結果から、参加者の一部ではあるが、研修会で学んだ内容を各現場で実践していることが分かった。

しかし、行動障害のある発達障害者に効果的な支援を行うには、関わる職員が発達障害や応用行動分析、ネットワーク方法等有効な支援手法を、深く且つ幅広く理解し、支援技術を備えていることが必須であると考えられる。過去 2 年間の研修会では、モデル的な実践発表を行い、行動障害のある発達障害者への支援手法を紹介した。そこで今年度は、事例検討を中心とし、行動障害のある発達障害者への支援方法について、参加者で協議し、共通認識を行う研修会を開催した。そのため参加条件として、「発達障害や応用行動分析の基礎知識がある」市内の福祉サービス事業所や教育関係者とした。

研修会申し込みは 41 名、当日参加は 40 名であった。研修会当日と 3 ヶ月後の事後アンケート調査を行い、この研修会で学んだ内容を、どのように各現場に取り入れているか測定した。更に、研修会で学んだ内容をより深めるため、5 ヶ月後にフォローアップ研修会を実施した。

研修会直後のアンケート回収数は 39 であり、回収率は 98% であった。事例検討は、48% が「参考になった」、41% が「少し参考になった」と回答している。

3 ヶ月後の事後アンケート調査は、配布数 40、回収数 27、回収率 68% であった。その結果、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 22%、「少し取り組んだ」が 38% あり、回答者の 60% がこの研修会後に、参考になった取り組みを実施していることが分かった。実際に取り入れている内容は、「構造化」「スケジュール」「視覚的支援」「トークンシステム」「分析シートを用い、ABC 分析を行った」「ことばかけの見直し」「行動の意味を考えるようにした」等であった。

回答者の 33% が研修会で学んだ内容をあまり実践しておらず、その理由として、参加者一人で事業所職員に提案することが難しいこと、参加者の知識や経験不足、現在は直接支援を行っていない等があがっていた。

フォローアップセミナーには、40 名中 10 名の参加があった。コミュニケーションに関する講義と、グループによる事例検討を行った。

事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあつ

たため、今後も研修会を継続することが必要である。また、研修会に参加した一部の職員だけが事業所で取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、発達障害者支援センターの役割として、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。

II. 事業目的

市内の福祉サービス事業所や教育関係者等が、講義や事例検討を通して行動障害のある発達障害者への支援方法を学び、現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することを目的とする。

III. 事業の実施内容

平成 28 年 10 月 16 日（日）に、講義と事例検討を行った。（資料 2-1）

効果検証に関しては、研修会当日（資料 2-2）と 3 ヶ月後（資料 2-3）にアンケート調査を実施した。また、フォローアップセミナーを、平成 29 年 3 月 5 日に実施した。（資料 2 - 4）

IV. 分析、考察

1. アンケート調査結果

① 研修会当日のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。研修会参加人数は 40 名、アンケート回収数は 39、アンケート回収率は 98%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表 1 に示す。

表 1 所属機関についてお尋ねします

	児童発達支援センター	放課後等デイサービス	教育機関	福祉サービス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	2	10	1	14	5	4	3	39

アンケートの結果について、図 1 から図 3 に示す。

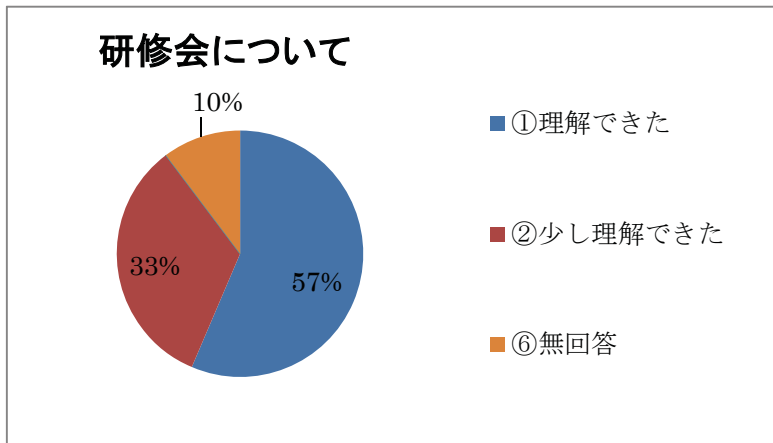


図 1 「今日の研修会はいかがでしたか」について

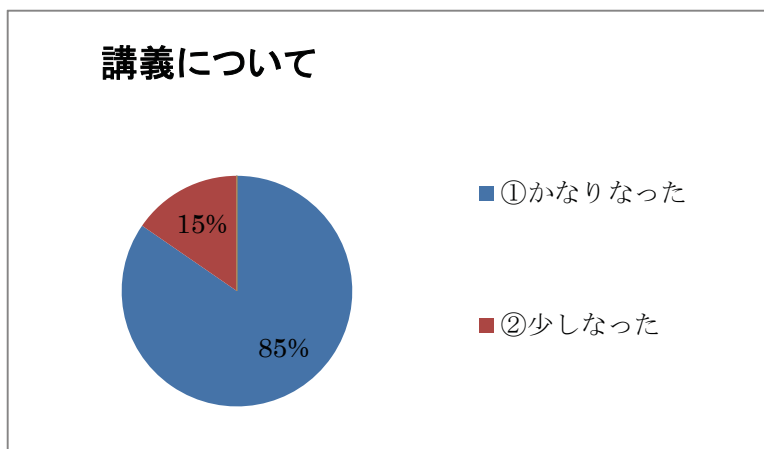


図 2 「今本先生の講義は参考になりましたか」について

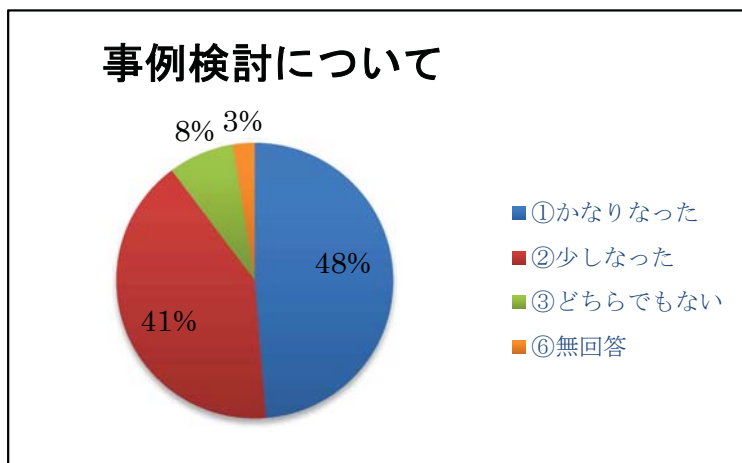


図 3 「事例検討は参考になりましたか」について

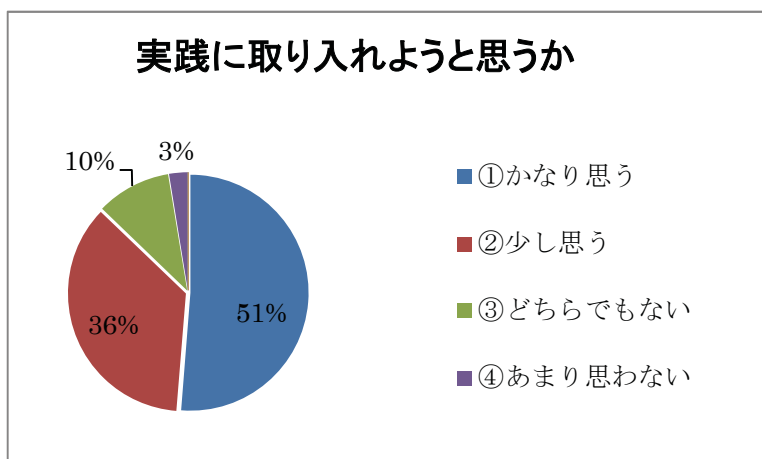


図4 「今後、実践に取り入れようと思いますか」について

図3の「事例検討は参考になりましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・ 行動問題の手がかり→問題行動→結果→行動の原因の重要性
- ・ 事例を通して、ABCの手法を体験することができた。
- ・ 問題に対する考え方やプロセスの進み方等、原因追及から問題解決の方法（複数）
- ・ 行動障害に対応する際に、様々な情報は必要になることや、情報収集や支援の方策について考えることができた
- ・ 様々な視点から意見があり、参考になった。予防のための取り組みという視点が大切だと、改めて実感した。
- ・ 提供された情報をもとにシートを用いて対応法を考える事の難しさと、意義が理解できた。

図4「今後、の実践に取り入れようと思いますか」の主な具体的な内容を以下に示す。

- ・ トークンの利用（4）
- ・ 4つのアプローチを常に考え、支援していきたい
- ・ ABC分析、フォームの活用（3）
- ・ スケジュールや構造化の導入（2）
- ・ PECSカードの見直し（3）
- ・ 利用者の行動障害に照らして、問題解決方法を改善していきたい
- ・ 利用者に合った環境は何か、どういった対応が合っているのか、その人が暮らしやすくなることを一つ一つ考えて取り組んでいきたい

図1の結果から、57%が研修内容は「理解できた」、33%が「少し理解できた」と回答しており、90%の回答者が研修会内容は概ね理解できたことが分かった。

図2の結果から、講師の講義で参考になった内容が、85%が「かなりあった」、15%が「少しあった」と回答している。そのため参加者全員が、今回の講義は、今後の支援に活用できる内容であると認識していることが分かった。

図3の結果から、48%が事例検討は「かなり参考になった」、41%が「少参考になった」と回答しており、約9割の参加者にとって、参考になった事例検討であることが分かった。その一方で、「どちらでもない」が8%、「無回答」が3%であった。「どちらでもない」と回答した理由は、対応経験がないことや知識不足等が主であった。

図4の結果から、51%が今回の研修会で学んだ内容を今後の実践の中に取り入れようと「かなり思う」、36%が「少し思う」と回答しており、約9割の参加者にとって、現場に取り入れることができる研修会であることが分かった。その一方で、「どちらでもない」が10%、「あまり思わない」が3%であった。「どちらでもない」、「あまり思わない」と回答した理由は、対象となる事例がないことや理解不足等であった。

② 研修会から3ヶ月後のアンケート調査結果

研修会から2ヶ月後の平成29年1月中旬に、研修会参加者全員にアンケート調査票を送付した。アンケート調査期間は、平成29年1月13日から1月31日である。アンケート配布数40、回収数27であり、回収率68%であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表2に示す。

表2 所属機関について

	児童発達支援センター	放課後等デイサービス	教育機関	福祉サービス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	2	6	1	11	2	2	3	27

アンケートの結果について、図4に示す。

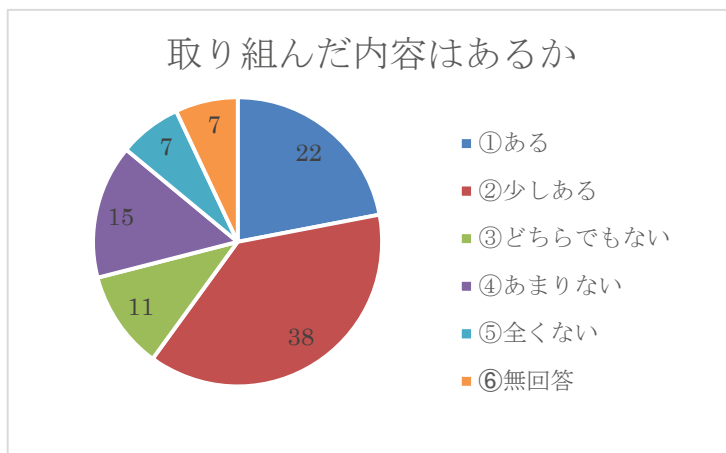


図4 前回の研修会を参考にして、学校や事業所の中で取り組んだ内容がありますか。

図4の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「ある」が22%、「少しある」が38%あり、回答者の60%の参加者が、この研修会後に参考になった取り組みを実施していることが分かった。その具体的な取り組みの内容を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容>

- ・物理的構造化（複数）
- ・スケジュール（複数）
- ・視覚的支援（複数）
- ・トークンシステム（複数）
- ・個人用ラベル
- ・ABC分析を行った（母親・同僚）
- ・子どもの行動の意味を考えるようにした
- ・一人一人の好子を考えるようにした
- ・個人に合ったことばかけや待つ姿勢
- ・保護者へ家庭での支援のアイデアを提案した（パズル式トークン等）
- ・同僚へ「プロンプトは外していくもの」と助言した
- ・本人が落ち着ける環境調整
- ・良い行動はほめる

図4の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「どちらでもない」が11%、「あまりない」が15%、「全くない」が7%であり、回答者の33%であった。その具体的な理由を以下に示す。

<学校や事業所の中で取り組んだ内容が「どちらでもない・あまりない・

全くない」の回答者の主な内容>

- ・個人的には勉強になったが、事業所に一人で提案をするのは難しい
- ・受講者自身が、研修内容をよく理解できなかった（複数）
- ・直接支援を行っていないため（複数）

また、事後アンケート調査の項目「今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

- ・今回と同じような ABA の研修会
- ・高齢化の方への支援
- ・余暇活動
- ・自発的な行動やコミュニケーションが難しい方への支援方法
- ・発達障害児者への支援のスキルアップ
- ・神戸大学大学院 山根隆宏教授
- ・立正大学 中田洋二郎教授
- ・坂井聡先生・水野敦之先生・山田充先生・本田秀夫先生・野口幸弘先生
- ・酒井均先生・木谷秀勝先生・今本繁先生・岡田尊司氏・東田直樹さん

③ フォローアップ研修会のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。研修会参加人数は9名であり、全員がアンケートを記入した。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表3に示す。

表3 所属機関について

	児童発達支援センター	放課後等デイサービス	教育機関	福祉サービス事業所	相談機関	入所施設	その他	合計
人数	0	3	1	1	2	2	0	9

アンケートの結果について、図5、6に示す。

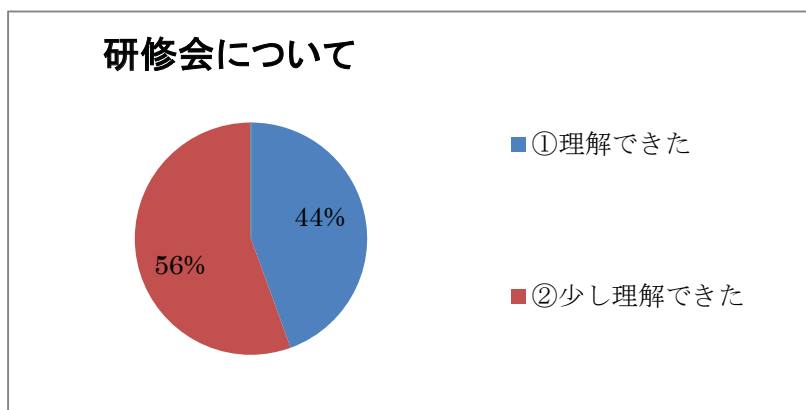


図5 「研修会は理解できましたか」について

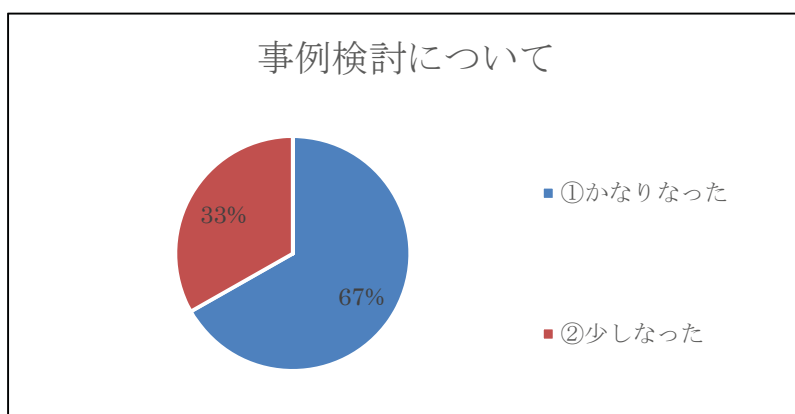


図6 「事例検討は参考になりましたか」について

図5及び図6から、フォローアップ研修会は参加者は理解でき、参考になった内容であったことが分かる。

また、フォローアップ研修会アンケート調査の項目「全体的な感想や今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

- ・当事者が入った対応方法（実践）などが、あるとよい。
- ・自閉症の特性や事業について、他の施設でどのような支援をしているのか等知りたい。
- ・時間をかけてゆっくりグループ討議をしたかった。

2. 考察

表4は、研修会当日アンケート調査項目「今回の講義と事例検討で学んだ内容を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」の具体的な内容と、事後アンケート調査項目で、学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容をまとめたものである。

表4 研修会を参考にして自分の現場に取り入れた内容

当日アンケート	事後アンケート
<ul style="list-style-type: none"> ・ スケジュールや構造化の導入 ・ トークンの利用 ・ 4つのアプローチを常に考え、支援していききたい ・ ABC分析、フォームの活用 ・ PECSカードの見直し ・ 利用者の行動障害に照らして、問題解決方法を改善していききたい ・ 利用者にあった環境は何か、どういった対応が合っているのか、その人が暮らしやすくなることを一つ一つ考えて取り組んでいききたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 物理的構造化 ・ スケジュール ・ 視覚的支援 ・ トークンシステム ・ 個人用ラベル ・ ABC分析 ・ 子どもの行動の意味を考えるようにした ・ 一人一人の好子を考えるようにした ・ 個人に合ったことばかけや待つ姿勢 ・ 保護者へ家庭での支援のアイデアを提案した（パズル式トークン等） ・ 同僚へ「プロンプトは外していくもの」と助言した ・ 本人が落ち着ける環境調整 ・ 良い行動はほめる

表4の結果から、自分の現場に取り入れたい内容は、当日アンケート調査では、「構造化」「スケジュール」「トークンシステム」「ABC分析」「PECSの見直し」等であった。事後アンケート調査で実際に取り入れている内容は、「構造化」「スケジュール」「視覚的支援」「トークンシステム」「ABC分析」「個人用ラベル」「個人に合った好子」「個人に合ったことばかけ」「ほめる」等であり、当日アンケート結果と共通する項目が多かった。

しかし、研修会後に現場に取り入れている内容は、目に見える環境調整やツール以外に、ABC分析の実践や個人に合ったことばかけや好子、同僚や家族への働きかけ等があがっていた。そのため、今回の研修会を通じて、ABC分析を行い、本人の行動の意味を考え、個人に合った人的・物理的環境調整を行う契機になった参加者もいたと考える。

反面、事後アンケート調査では、回答者の40%が研修会で学んだ内容を実践していなかった。その理由として、受講者が研修の内容を理解できなかったことや職員に提案することが難しいこと、受講者が直接支援を行っていない等があがっていた。

学校や福祉サービス事業所等の各現場がこれまで培ってきた知識・技術や体制、また、そこに所属する職員の経験等によって、行動障害がある自閉症者への理解や対応には、かなり温度差がある。しかし、当日及び事後アンケート調査結果では、対応困難事例に対する効果的で具体的な支援方法を学ぶ研修会を望む声が多かったため、今後も実践報告や事例検討等研修会を継続することが

必要と考える。また、研修会に参加した一部の職員だけが取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。加えて、「発達障害者支援のための初級セミナー」や「構造化セミナー」、「実践報告会」等各種研修会を促進し、市内全体のスキルアップを目指したい。

平成 28 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

青年期ワークショップ

I. 事業要旨

このプログラムは、北九州市発達障害者支援センターに継続相談をしている青年期の相談者の中で、学校での対人関係に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方を対象に、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まる少人数での活動を行うことによって、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的としている。

平成 26 年度より実施しているプログラムであり、今年度も夏季休暇中を利用して、4 回シリーズで活動を行った。参加者は、高校生が 6 名、高校を中途退学しアルバイトをしながら高校卒業認定資格取得のための準備中の方が 1 名、大学生・専門学生が 1 名の計 8 名であった。昨年度同様に、参加者の緊張を和らげるために活動の導入時にアイスブレイクを実施し、その後ゲーム活動やロールプレイの話し合いを行うようにスケジュールを組み立てた。

効果検証に関しては、プログラム開始前と終了後に、ソーシャルスキルチェックリストと自尊感情尺度シートの自己評価を行い、参加者の変化の測定を行った。また、毎回の活動ごとの参加者の様子を記録し、活動中の変化を見た。また、プログラム終了後に、参加者および保護者に対し、インタビュー調査とアンケート調査を実施し、家庭や学校での参加者の変化を聞き取った。

ソーシャルスキルチェックリストと自尊感情尺度シートについては、最終評価が可能だった 7 名の変化を見た。ソーシャルスキルチェックリストは、5 名が、最終評価の点数が上がっていた。自尊感情尺度シートについては、4 名が、最終チェックの評価点が上がっていた。活動中は、参加者同士で積極的に関わりながら話し合う場面が多く見られ、コミュニケーションスキルや対人対応の面で効果が見られた参加者がいた。一方で、社会的な振る舞いや作業遂行面に課題のある参加者も多く、参加者の認知特性や実行機能の課題が改めて分かった。今後も、参加者の特性に合わせた対応の工夫、および自己モニタリングに繋がるような活動の振り返りを丁寧に行うことが必要である。プログラム実施後のアンケート調査からは、6 名がワークショップに「また参加したい」と答えており、活動への満足度は高かった。ワークショップが参加者にとって「同年代の仲間と安心して過ごせる楽しい場所」になっていると考える。保護者アンケートの結果からは、ワークショップが本人にとって何らかの有効性があったと感じている保護者が多く、「学校以外の居場所作り」や「将来への情報を得る場」として活動の継続を希望する意見が多かった。市内には、青年期の当事者を対象に活動を行ってい

る機関が少なく、参加者の自立を支援するプログラムとしても活動の充実を期待されている。今後も関係機関と連携しながら、参加者が前向きに自分自身に向き合ったり、将来へのイメージを持てるような活動を企画し、継続的に参加できるよう配慮しながら、世代に応じた活動内容を考慮し実施していきたい。

II. 事業目的

青年期の発達障害者は、その障害特性から、所属集団での人間関係に困難を抱えていたり、周囲との違いを否定的に捉え、自尊感情が低下し劣等感が高まることも少なくない。北九州市発達障害者支援センターの青年期の相談者の中にも、学校での対人対応に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方がいる。そこで、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まり、少人数での活動を通して、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的とする。

III. 事業の実施内容

ワークショップは、夏季休暇中の午後2時から3時半までの時間帯に、4回シリーズで活動を実施した。参加者は、高校生が6名、高校を中途退学しアルバイトをしながら高校卒業認定資格取得のための準備中の方が1名、大学生・専門学生が1名の計8名であった。活動の進行については、北九州市発達障害者支援センターの職員が行ったが、3回目の「仕事発見！基礎講座」の講話は、北九州若者サポートステーションの職員に講師を依頼した。社会人先輩との座談会では、若者サポートステーションから一般就労に繋がっている成人の方に依頼し、経験を話してもらった。

活動内容の詳細と参加人数を、表1に示す。

表1 活動内容と参加人数について

日程	活動の内容	参加人数
7月 22日 (金)	アイスブレイク・ゲーム・ロールプレイ、茶話会	高校生4人 アルバイト1人
7月 29日 (金)	アイスブレイク・ゲーム・ロールプレイ、茶話会	高校生3人
8月 5日 (金)	「仕事発見！基礎講座」講話・社会人先輩との座談会	高校生2人 大学生1人
8月 18日 (木)	調理活動・茶話会	高校生4人 アルバイト1人

効果検証に関しては、プログラム実施前と終了後にソーシャルスキルチェックリスト(資料3-2)と自尊感情尺度シート(資料3-3)を参加者につけてもらい、参加者の変化を測定した。毎回の活動ごとに参加者の様子を記録し、状態の変化を見た。プログラム終了後には、参加者にインタビュー調査(資料3-4)を行った。保護者にはアンケート調査(資料3-5)を実施し、家庭での参加者の様子の変化を聞き取った。

その他の取り組みとして、平成28年10月24日及び10月31日に特定非営利

活動法人 nest を訪問し、活動についての情報交換会と施設見学を行った。nest の職員からは、活動内容や今後の連携などについての助言をもらった。

IV. 分析

1. 調査結果

① ソーシャルスキルチェックリスト

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後にソーシャルスキルチェックリストの自己評価を実施した。

自己評価の結果を、表 2 に示す。

表 2 ソーシャルスキルチェックリスト：自己評価得点

		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
I 集 団 行 動	対人マナー	7点	6点	13点	9点	9点	9点	10点	6点
		11点↑	6点	14点↑	10点↑	11点↑	11点↑	10点	未実施
	状況理解・心の理論	5点	7点	11点	7点	9点	8点	8点	1点
		8点↑	7点	13点↑	6点↓	11点↑	9点↑	10点↑	未実施
	セルフコントロール	4点	0点	10点	11点	7点	5点	3点	2点
		4点	0点	12点↑	11点	8点↑	6点↑	5点↑	未実施
課題遂行	6点	5点	10点	5点	10点	7点	7点	1点	
	8点↑	5点	13点↑	7点↑	11点↑	9点↑	7点	未実施	
II 仲 間 関 係 ス キ ル	仲間関係の開始	5点	8点	8点	3点	5点	5点	3点	4点
		5点	8点	9点↑	3点	5点	3点↓	3点	未実施
	仲間関係の維持	12点	12点	18点	8点	18点	12点	10点	10点
		13点↑	12点	18点	9点↑	18点	9点↓	9点↓	未実施
	仲間への援助	5点	9点	9点	3点	3点	3点	6点	8点
		6点↑	9点	9点	5点↑	3点	4点↑	4点↓	未実施
III コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン ス キ ル	聞く・話す	3点	3点	3点	5点	4点	3点	3点	0点
		3点	1点↓	6点↑	5点	4点	2点↓	2点↓	未実施
	非言語的スキル	5点	2点	6点	7点	3点	3点	5点	7点
		5点	0点↓	8点↑	7点	3点	4点↑	4点↓	未実施
	アサーション	12点	18点	18点	12点	13点	9点	4点	13点
		15点↑	14点↓	23点↑	13点↑	14点↑	7点↓	5点↑	未実施
話し合い	5点	2点	8点	6点	6点	4点	5点	3点	
	6点↑	1点↓	8点	7点↑	6点	4点	5点	未実施	
合計	69点	72点	114点	76点	87点	68点	64点	57点	
	84点↑	63点↓	133点↑	83点↑	94点↑	68点	65点↑	未実施	

ソーシャルスキルチェックリストは、各項目「0~20%達成」で0点、「21~50%達成」で1点、「51~80%達成」で2点、「81~100%達成」で3点とし、自己評価を行った。各項目、プログラム実施前の得点を上段、終了後の得点を下段に示し、下段の中で評価点が上がった項目を四角、評価点が下がった項目を太字で示す。

プログラム終了後の最終評価が実施できていない1名を除いた7名の変化を見る。ソーシャルスキルチェックリストの自己評価は、領域や項目によって点数が異なったが、プログラム終了後の最終チェックの方が合計評価点が上がっている参加者が、5名いる。特に、I 集団行動の【対人マナー】、【状況理解・こころの理論】と【課題遂行】、およびIII コミュニケーションスキルの【アサーション】が良くなっている参加者が、5名いる。

② 自尊感情尺度シート

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後に自尊感情尺度シートの自己評価を実施した。

自己評価の結果について、図1に示す。

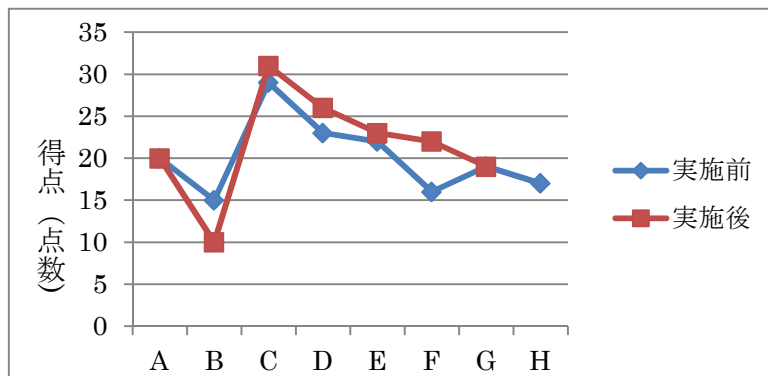


図1 自尊感情尺度：自己評価得点

自尊感情尺度シートは、各項目を4段階評定で点数化し、「強くそう思わない」で1点、「そう思わない」で2点、「そう思う」で3点、「強くそう思う」で4点とした。図1の縦軸は、参加者の自己評価得点を示す。

自尊感情尺度シートにおいても、プログラム終了後の最終評価が実施できていない1名を除いた7名の変化を見る。チェック項目は、個人によって異なり、自己評価の差が見られた。参加者8名中4名の方が、最終チェックの評価点が上がっている。評価点が下がった1名の方に関しては、「自分の意見とは違う、色々な考えがあることを知った」や「高校に入学後、自分にはできていないことがあると、改めて分かった」というコメントもあり、自己理解に繋がったことが、点数に影響していることが考えられる。

③ ワークショップ活動参加時の様子の変化

表3は、ワークショップ参加者の活動記録から、個人の特記事項をまとめたものである。

表3 ワークショップ参加者の活動記録

A	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動では、スタッフの口頭説明が理解できず、モデル実演を行うと、分かる。 ・ロールプレイの話し合いでは、テーマについて「自分だったらこうする」と意見を言う。 ・茶話会は、メンバーと好きなゲームについて話しをすることが多い。 ・講話は、話が続けると途中から眠ったり、話を聞いていない。 ・先輩との座談会は、先輩とメンバーの話を聞きながら頷いたり笑っている。 ・調理は、石鹸をつけずに手洗いする、蛇口を閉め忘れる。「調理経験があまりない」と話し、出来上がりをスタッフに確認する。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーの中心となってゲームを進めたり、ゲームの内容についてスタッフに新たな案を提案する。 ・ロールプレイは、自ら挙手して実演を行う。話し合いでは、積極的に意見を言う。 ・茶話会は、趣味や学校の話でメンバーと盛り上がる。 ・調理の材料の買い出しでは、色々な商品が見えるたびに「これでいいんじゃない？」と意見が変わり、全て揃えるまでに時間がかかる。作業は、手順書を見ても材料の配分が理解できない。作業中は、メンバーと話に夢中になって手が止まることが多い。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーとの話し合いで、メンバーがゲームの進め方に悩むと、自分の意見を提案する。 ・ロールプレイの話し合いでは、積極的に自分の意見を言う。メンバーの意見に興味を示し、質問する。 ・茶話会は、お菓子が余っていると、「まだあるよ」とメンバーに勧める。 ・講話は、スライドに注目して聞く。 ・先輩との座談会は、先輩に「上司との関係の取り方」について質問する。 ・調理は、スタッフの指示を聞きながら作業することが多い。道具が落ちてもそのまま使おうとする。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、自ら意見を言うことは少ないが、メンバーの意見に同調したり、スタッフの指示に応じながら参加する。 ・ロールプレイは、実演を促されると悩むが、メンバーから「相手役するよ？」と提案されると、実演を行う。話し合いでは、聞かれると自分の意見を発表する。 ・茶話会は、メンバーとゲームの話をする人が多い。 ・調理は、メンバーとどのように動いたら良いか悩む。スタッフが、手順書を見ながら一人で作業を行って良いことを伝えると、手順書通りの作業をこなすことができる。
E	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、自ら意見を言うことは少ないが、メンバーから聞かれると、意見を言う。 ・ロールプレイの話し合いでは、スタッフから聞かれると、自分の意見を言う。 ・茶話会は、メンバーとゲームの話をする。メンバーと話するうちに、徐々に顔が上がり、メンバーの顔を見て会話するようになり、声が大きくなる。

F	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、スタッフの説明が理解できていないメンバーに、言葉を付け加えて補足説明する。 ・ロールプレイの話し合いでは、スタッフから聞かれると、自分の意見を言う。 ・茶話会では、メンバーやスタッフと趣味や学校の話をする。
G	<ul style="list-style-type: none"> ・調理は、手順書を見ただけではどのように動いたら良いのか分からず、黙って立っている。スタッフが指示すると、作業を始める。材料の切り方が分からないと、「任せる」とメンバーに依頼する。メンバーと喋りながら作業することが多く、手が止まったり、作業が遅くなる。 ・茶話会は、初対面のメンバーとも趣味の話で盛り上がる。
H	<ul style="list-style-type: none"> ・講話は、スライドに注目しながら聞き、関心のある仕事の内容についてはレジュメ資料にメモをする。開始15分経過した頃から、椅子に足をかけたり、机に肘をついて爪を触りながら話を聞く。 ・先輩との座談会は、先輩に「学生時代のアルバイト経験」や「授業のカリキュラムの取り方」、「今の仕事に就いた理由」について質問する。先輩とメンバーが話している時は、机下でスマートフォンを扱っている。

ワークショップの活動に継続参加する中で、コミュニケーションスキルや対人対応面で、参加者に変化が見られている。ゲーム活動では、メンバー同士で話し合ったり、スタッフに意見を提案しながら、メンバー主体で活動を進めることが多かった。ロールプレイでは、シナリオ資料を読み合っ、テーマについて参加者全員が、自分の意見を発表していた。メンバーの意見に興味を示す参加者も多く、出た意見に同調したり、「自分だったらこうする」と話し合いが展開された。茶話会では、メンバー間で共通の趣味の話をして過ごす様子が多く見られた。メンバーとの関わりを通して、徐々に顔を上げて大きな声で話せるようになった参加者がいた。同年代の社会人先輩との座談会では、関心のある就職や一人暮らしに関する質問をしており、自立へのイメージに繋がっている参加者もいた。

一方で、口頭説明が続くと話を聞いていなかったり、内容を理解できていない参加者もいた。また、作業場面では、一般的なマナーが分かっていなかったり、作業遂行面での課題が見られる参加者が複数おり、参加者の認知特性や実行機能などの課題が、改めて分かった。

④ ワークショップ参加者へのアンケート調査

インタビュー項目は、「1. また参加したい活動は何ですか?」「2. ロールプレイ活動でメンバーと話し合った内容は、参考になりましたか?」、「3. 講話や座談会での話は、参考になりましたか?」「4. 講話や座談会について、意見があれば、教えてください」「5. 調理活動で感じたことや、分かったことは、ありますか?」「6. ワークショップに参加して、他のメンバーとの交流ではできましたか?」「7. 今後、青年期ワークショップへの参加を

希望しますか？」の7項目である。プログラム終了後の最終評価が実施できていない1名を除いた7名に対し実施した。書くことが苦手な参加者については、つばさスタッフが、インタビューを行った。

アンケート調査の結果から、活動については、全員が「メンバーと交流ができて、楽しかった」と答えていた。6名が、ワークショップの活動に「また参加したい」と答えており、活動への満足度は概ね高かった。

特に、ロールプレイの再実施を希望する意見が多く、4名が、メンバーと話し合ったことが、「参考になった」と答えていた。具体的には、「トラブルの原因を考えるようになった」、「相手との距離感を考えるようになった」、「自分と合うのか、考えてから友人と仲良くなった方が良かった」となどの意見があがり、話し合いの内容を実生活での対応に汎用させている参加者がいた。

講話については、「話を聞くだけだと正直疲れる」や「興味のあるパソコン関係の職業の話だと聞けると思う」という意見があった。社会人先輩と座談会を通し、「将来の計画を立てるようになった」、「今後は、自立を継続するための方法を聞きたい」と答えている参加者が1名おり、将来への具体的なイメージに繋がることのできたと考える。

調理活動は、「指示通りに動けた」、「メンバーの役に立って良かった」という感想があり、小集団での作業経験に達成感を感じている参加者がいた。「大人数での作業は、みんなが一斉に喋るので混乱する」、「作業が決まっていた方が、やりやすいと思った」という意見もあり、自分自身の特性や対応の気づきに繋がっている参加者もいた。

⑤ 保護者アンケート

ワークショップから半年後に、アンケート送付可能な保護者7名に対し、アンケート調査を実施した。アンケート回収数は6、アンケート回収率は86%であった。

アンケートの結果について、表4、5、6、7と図2、3に示す。

表4 「本人が、青年期ワークショップに参加することを希望した理由は何か（重複回答可）」について

① 家庭や学校以外の場所で、同じ趣味や悩みを持つ同年代の仲間活動する場所が欲しいから	4
② 同年代の人たちの関わり方やコミュニケーションの練習をして欲しいから	3
③ 少人数での活動を通して、社会マナーや振る舞い方を覚えて欲しいから	0
④ ワークショップに参加することで、自分自身のことや相手の考えを知るきっかけにして欲しいから	2
⑤ 進学や就職についての情報を知りたいから	1
⑥ 参加を勧められたから	3
⑦ その他	1

表5 「本人が、ワークショップに参加して何か家庭や学校で何か変化したことがあれば、教えてください」について

・特に変化はないが、話が盛り上がって楽しかったようだ。
・友達と外出する機会が増えた。
・学校の気の合う人たちとも話すようになった。
・自分は自分で良いのだ、という気持ちで過ごせるようになった。
・気の合うメンバーがいて、嬉しそうだった。
・進路についてより積極的に話すようになった。

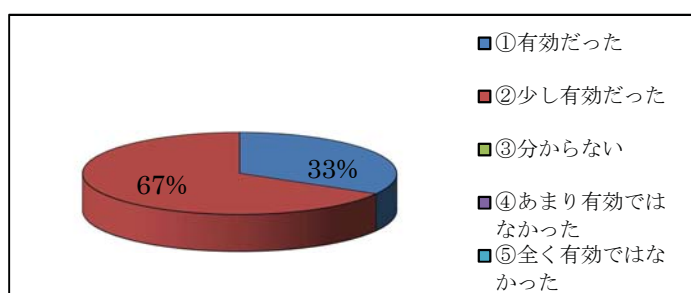


図2 「本人が、ワークショップの活動に参加することは有効でしたか」について

表6 「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか（重複回答可）」について

① 教師や友達との関わり方	2
② 異性との付き合い方	0
③ 家族との関わり方	1
④ 生活面での対応（朝起きれない、家事ができない、電話対応が苦手など）	2
⑤ 学習面についての心配（授業についていけない、課題提出ができないなど）	0
⑥ 進路や就職についての不安（受験に危機感がない、自立できるのか不安など）	5
⑦ その他	0

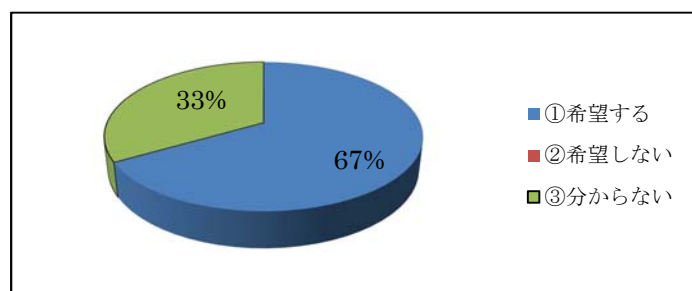


図3 「次年度も、本人が青年期ワークショップに参加することを望まれますか」について

表7 「今後の青年期ワークショップに関する要望などがあれば、教えてください」について

・職業体験や見学などを企画してもらえたら嬉しい。
・茶話会が特に楽しかったようだ。
・開催回数が少ないことが残念。
・友人を誘うことが苦手なので、集う機会を作ってもらえると嬉しい。
・部活や課外授業で平日参加が難しい。曜日や時間帯をもっと増やして欲しい。

図2の「本人がワークショップの活動に参加することは有効でしたか」の主な内容を以下に示す。

- ・学校以外の関わりがあることに、興味が持てた。
- ・初めての参加だったが、楽しかったようだ。(2)
- ・他のメンバーと交流ができた。
- ・学校以外の居場所があることへ安心感が持てた。
- ・学校の友人とはトラブルがあるが、メンバーとは連絡先を交換したり、交流が増えた。
- ・知り合いが増えて嬉しそうだった。
- ・進路について考えるようになった。

表6の「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか(重複回答可)」の主な内容を以下に示す。

<④生活面での対応(忘れ物が多い、電話対応が苦手など)>

- ・思い通りにならないと、切り替えが苦手。
- ・朝が起きれない。
- ・忘れ物が多い。
- ・家事ができない。

<⑥進路や就職について不安(どんな就職先があるのか分からないなど)>

- ・本人に合う仕事が分からない。(3)
- ・本人がどういう進路に進みたいのか分からない。
- ・きちんと出勤できるのか不安。
- ・本人が途中で挫折しないか心配。
- ・現実感のない夢を話しているので心配。
- ・受験まで間もないのに、危機感がない。

表4の結果から、「家庭や学校以外での場所で、同じ趣味を持つ同年代の仲間と活動する場所が欲しいから」という回答が最も多く、次いで「同年代の人たちの関わり方やコミュニケーションの練習をして欲しいから」、「参加を勧められたから」という回答が多かった。

保護者にとってワークショップは、「学校以外の居場所作り」や「少人数集団でのソーシャルスキルトレーニングの場」としてのニーズが高いことが伺える。

表5の結果からは、ワークショップに参加以降、参加者が学校でも友人との関わりが増えたり、活動の幅が少しずつ広がっていることが分かった。自分のことを前向きに考えるようになったり、進路について考えるようになるなど、自信をつけて次の一步を踏み出そうとしている参加者がいた。

図2の結果から、33%がワークショップへの参加は「有効だった」、67%が「少し有効だった」と回答しており、アンケートに答えた保護者全員が、ワークショップが本人にとって、何らかの有効性があったと感じていることが分かった。

表6の結果から、「進路や就職について不安」という回答が最も多く、適職を見つけることができるのか、仕事を継続できるのかといった自立についての心配する意見が殆どだった。次いで、「教師や友達との関わり方」や「生活面での対応」の回答が多く、時間や物の管理などに関する具体的な困り感があげられた。

図3の結果から、67%が「次年度もワークショップに参加させたい」と希望しており、活動の継続を希望する意見が多かった。「分からない」と答えた33%の保護者に関しては、「部活や課外活動によっては、参加が難しいかもしれない」と意見があり、表7の結果からも、「開催日数を増やして欲しい」などの要望があがっている。

2. 考察

青年期ワークショップは、一昨年度から実施しており、今年度で3回目を経過したプログラムである。活動は、夏季休暇中に4回シリーズで実施したが、活動終了後のインタビューでは、今年度も6名の参加者が「ワークショップにまた参加したい」と答えており、「メンバーとは初対面で不安だったが、話が合って楽しかった」、「みんなで協力しながら楽しく参加できた」、「メンバーとは無理に話題を作らなくて良かったので、参加しやすかった」などの感想が出ていた。学校では、クラスメイトや教師に気を遣いながら過ごしていたり、大きな集団での生活に少なからずストレスを感じているメンバーにとっては、ワークショップが同年代の仲間たちとリラックスしながら安心して関わることのできる楽しい居場所になることができたと考える。

メンバーとの活動を通し、少しずつ笑顔が増えたり、相手の顔を見ながら発言できるようになった参加者もいた。メンバー同士で出し合った意見をまとめたり、妥協案を職員に提案する場面も多く見られ、ワークショップがコミュニケーションスキルを練習する場としても有効であったと考える。「自分と違う意見が面白かった」、「色々な考えがあることが分かった」などの意

見も出ており、他者視点の理解に繋がることもできた。ロールプレイ活動を通して、「短気な自分を改善することができた」、「トラブルの原因を考えるようになった」などの話し合った内容を実生活での対応に生かしている意見も複数あがった。

家族からは、学校でも気の合う友達ができたり、進学を前に進路について積極的に考えるようになっていくなどの意見が聞かれ、参加者がワークショップ終了後も少しずつ自信をつけて前向きになっていることが分かった。

しかし参加者には、社会的な振る舞い方や作業遂行面での課題も見られる。今後も、参加者の状態に合わせて、スケジュールをより具体的に提示する、コミック会話やソーシャルストーリーなどの手法を用いた視覚資料を準備し、社会マナーやルールの確認を行う、作業の役割分担などは事前に決めておき、参加者が自立的に作業できるような環境の設定を行う、などの対応の工夫が不可欠である。参加者の自己理解に繋がるようなプログラムの内容の検討および個別面談でフィードバックを継続することも必要である。

また、市内には、中学卒業後の青年期の当事者を対象に活動を行っている機関自体が少なく、保護者からは、自立への手がかりを得る場としても活動の充実を期待されている。今後も、参加者の状態変化や家族の意向に留意しながら、地域の社会資源と連携し、参加者が前向きに自分自身に向き合えて、将来へのイメージを持つことができるように、活動を継続していく必要がある。